



文＝伊藤哲也
写真＝亀井川 英樹

駅

舎を出ると、寒風が頬を刺した。雪雲りの空を見上げ、真冬こそ温かい旅をしようと思う。砂川駅から車でおよそ三十分、貴重な炭鉱遺産を紹介する赤平市炭鉱遺産ガイド施設に到着した。まずは展示室をひと周り。発破



赤平市炭鉱遺産ガイド施設では、炭鉱に使われた道具や当時の写真、坑道の模型などを展示している。

立坑櫓の外観。上部の滑車はケージを昇降させるための装置。●赤平市炭鉱遺産ガイド施設／赤平市字赤平485 ☎0125・74・6505。開館時間9:30～17:00(入館16:30まで)。入館無料。ガイド付き見学は10:00～13:30の2回、約90分、大人800円。予約不要。月曜・火曜休。



砂川駅

◎第二〇七回

砂川駅

を仕掛ける際、炭層に穴をあける道具や火薬など、実物を前にすると、地底での緊張感が伝わってくる。ここでは「炭鉱遺産ガイド付き見学」を行っている。ガイドの三上秀雄さんは住友赤平炭鉱に二十五年間務めた元炭鉱マン。採炭係を振り出しに保安係員や発破担当を務め、救護隊員でもあった。一九九四年(平成六)の閉山後も、書

類や機械類の保存を担ってきた。この炭鉱の生き字引のような人である。

ヘルメットを着け、さっそく住友赤平炭鉱の立坑櫓に入った。立坑はいわば地上と地下を結ぶ巨大なエレベーター。採炭現場へ人を



立坑櫓のヤード(操車場)。立坑は人員・石炭の運搬だけではなく、外気を取り込む通気の設備でもあった。ちょっとSF的な光景である。

運び、地下から石炭を引き上げる巨大施設だ。

「この立坑では地下四一五メートル、六一五メートルの二カ所に操車場せうしゃじょうがありました。そこに石炭を積んだトロッキを集め、四機のエレベーター(ケージ)で地上に引き上げます。スピードは分速七十二メートル。一分もかかり





(左) 自走枠の前に立つ三上さん。大きな歯車状の機械(ドラムカッター)を回転させて、石炭を掘り崩す。その上の5枚の鋼板で坑道の天井部を支えた。(右) 坑道を掘進するロードヘッダー。断層やガス突出に注意しながら掘り進んだ。



(左) 立坑槽の巻上機。電気力によって回転させ、鋼製ロープによってケージを昇降させた。(右) 強靱な鋼製ロープ。細い鋼線をより合わせ、直径約6cmの太いロープにしてある。

ません」(三上さん)。
一つのケージに四車、二つのケージで合計八車のトロロッコが同時に引き上げられ、地上でレール上を動く。石炭を搬出すると、トロロッコはまた自動的にケージへ戻っていく仕組みになっていた。うなり

を上げ、運び、崩れ、きりきりと筋肉が収縮を繰り返すような、実に力強い光景だったに違いない。
立坑の揚炭能力は年間一四〇万ト。この炭鉱はピーク時(昭和四二年)に、斜坑も含めて二九〇万トを出炭した。坑員、職員、下請けを含めて、最大四七八七人が働いたという。
もう一つの見学施設が、自走枠整備工場である。自走枠とは回転する歯車のようなドラムカッターで石炭を掘り進めると同時に、坑道の天井部分を鋼板で支える機械である。手作業で坑道に支柱を建てていくのに比べ、非常に効率が高かった。
もっともどれだけ機械化が進んでも、常に危険と隣り合わせである。特に火災は事故につながった。「私も救護隊員として、十五キロの酸素ボンベを担いで、救出に向かったことが何回もありました」と、三上さん。
命がけの仕事であるだけに、坑員同士の絆は強く、家族も含めて人間関係は生涯続くという。大げさではなく、「生死をともしする」

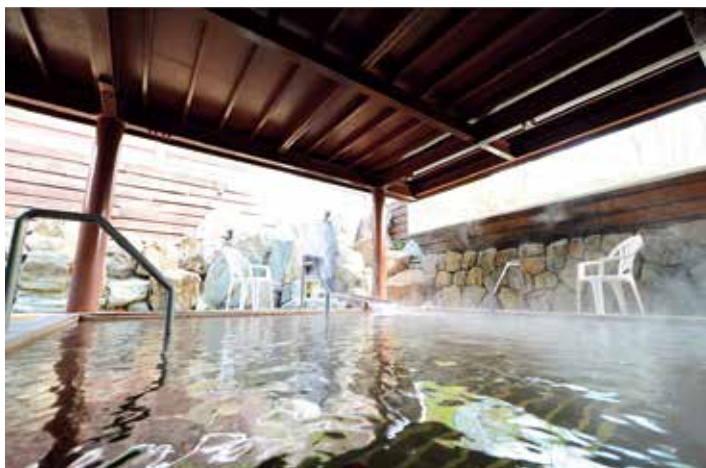
(右) 大浴場は窓が大きく、明るい。露天はないが、ジェットバス、サウナ、水風呂がある。泉質は冷鉱泉。循環ろ過、殺菌、加温している。(下)「上砂川岳温泉パンケの湯」の客室。和室はトイレ付、トイレなしの2タイプあり、部屋食。洋室、和洋室もある。



覚悟で結ばれているのだ。
今 夜の宿泊は「上砂川岳温泉パンケの湯」。山間にひっそりと建つ二十三室の宿である。湯



(左) 脂の乗った合鴨の鍋に、しみじみと冬を感じた。(右) 夕食の造りと「パンケの湯」ラベルの純米吟醸酒(金滴酒造)。アルコールの持ち込みもOKといううれしい宿である。

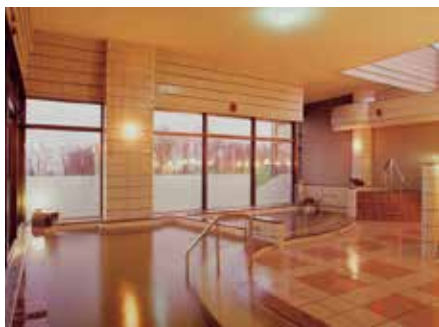


「うたしない チロルの湯」の露天風呂(写真提供/チロルの湯)。泉質はナトリウム-炭酸水素塩泉。循環ろ過、殺菌、加水・加温している。●歌志内市字中村78-3 ☎0125・42・5588。日帰り入浴は6:00～8:00(朝湯)、10:00～22:00(入館21:30まで)、大人500円、無休。宿泊は1泊2食付き2名1室ひとり9,800円～。

「うたしない チロルの湯」の山側に建つ。この一帯もかつては炭鉱住宅(炭住)が建ち並んでいた。湯は透明に近いが、ろ過前の源泉は黒いという。さ



移設された旧上砂川駅舎。炭鉱町の人間模様を描いたテレビドラマ「昨日、悲別(かなしべつ)で」(脚本:倉本聰)で、悲別駅として使われた。4月上旬～11月上旬には内部も見られる(9:00～17:00)。上砂川町中央北1条1丁目2。



「美緑の宿 グリーンパークしんとつかわ」の大浴場(写真提供/グリーンパークしんとつかわ)。泉質は単純温泉。循環ろ過、殺菌、加温している。

われていた時代の名残である。『美緑の宿 グリーンパークしんとつかわ』にも足を延ばした。とろりとなめらかな湯は、薄い茶褐色で透明感がある。鉄分が多く、体が温まりやすく冷めにくい。レストランでは金滴酒造の酒粕を使った「酒粕ラーメン」などが味わえる。

宿泊者は三階の展望風呂にも入れる。露天ではないが、窓を開放し、田園風景を堪能できるそう

だ。展望風呂は貸し切り(有料)にもでき、加温のみの源泉百割である。炭鉱遺産、温泉、地元グルメ。空知の冬の旅は、心身ともによく温まった。